

[069] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10199>

出版情報：語文研究. 69, 1990-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《會員著書紹介》

今井源衛著『王朝の物語と漢詩文』

本書は今井源衛先生の六番目の論文集にあたり、主に平安朝の漢文学に関するものを集める。収録論文及び資料は次のとおり。

- 一、奈良から平安へ
- 二、平安文学の作者と読者
- 三、平安朝の物語と漢詩文
- 四、漢文伝についての一問題 — 類聚国史「人」部の薨卒伝 —
- 五、かぐや姫の面影 — 「姮娥」と「少女」 —
- 六、平安宮廷の裸踊り
- 七、伊勢物語の史実をめぐって
- 八、在原業平の兄弟と子供たち — 守平・棟梁・清貫母のこと —
- 九、大江音人阿保親王子息説をめぐって
- 一〇、「老閑行」のこと
- 一一、勘解由相公藤原有国伝 — 一家司層文人の生涯 —
- 一二、日本文学と年中行事
- 一三、「まことは」考
- 一四、女の書く物語はレイブから始まる

〔資料〕

- 一、九州大学図書館蔵支子文庫本『大和物語』について
 - 二、翻刻 山鹿素行写、古注「枕草子」乾・坤
- これらが一冊にまとめられたことで、著者が長年にわたりさまざまの場で発表してこられた平安漢詩文についての論文をまとめて見

ることができるようになったのはすこぶる有益である。就中、「勘解由相公藤原有国伝」、および、資料篇の「九州大学図書館蔵支子文庫本『大和物語』について」は九州大学文学部紀要の『文学研究』に掲載されていたため、これまで一般の読者がみるには不便であった貴重なものである。

(平成二年二月 笠間書院 A5判 三三三頁 九〇〇〇円)

今西祐一郎他校注

新日本古典文学大系24

『土佐日記・蜻蛉日記』

紫式部日記・更級日記』

難解をもって鳴る『蜻蛉日記』に、今西祐一郎氏による新しい注解が付された。底本は従来の諸注釈書と同じく宮内庁書陵部蔵桂宮本を用いる。周知のように、『蜻蛉日記』という作品は底本がそのままでは底本たりえない、乱れた本文をもつ作品で、戦後に限っても十数種にのぼる注釈書の追求にもかかわらず、依然存疑の箇所は少なくない。今西氏にとっても当然それらは本文批判の課題となったわけだが、氏の本文批判の姿勢として注目すべきは、最近の諸注釈書においてほぼ定説化しつつあった本文のいくつかに対して再考を促した点であろう。

たとえば、中巻「ましみずのましてほどふる物ならばおなじぬれにておりもたちなむ」という兼家歌の第四句「おなじぬれにて」を諸注多く「同じ沼にも」と改訂するが、『義孝集』の歌を証として

「同じ濡れ」なる言いまわしが『法華経』葉草喻品にいう「一味の雨」を指すものではないかという指摘など、意表をついた、しかしきわめて適確な解釈といふべきである。

他にも、左大臣源高明の室、愛宮の筆跡についての評語「いときなき（幼稚な）」を「いとになき（すばらしい）」、また「木の立ち枯れに（底本）のたちからしに」ひとくく」と鳴く西山の鶯について、「木の立ち枯れに」ではなく「軒ちかくに」ではないかといった改訂案など、従来明確な根拠もないままに固定されかかっていた『蜻蛉日記』の本文に対し、新たな興味をかき立てずにはおかないであろう。

「解説」においても、『蜻蛉日記』の成立事情について、これまた意表をついた見解が述べられる。すなわち、私家集としての「兼家集」が存在しないということに注目し、『蜻蛉日記』上巻が「兼家集」としての役割をもあわせ担う作品として編まれたものではなかったか、と。これは『蜻蛉日記』執筆の動機を、道綱母という女性の内面に探ることを第一とした従来の立場と必ずしも相容れないものではないが、いささか心情的な偏向を示していた『蜻蛉日記』成立論に一石を投じたといふべく、今後の論議が期待される。

（平成元年十一月 岩波書店 A5判 五七二頁 三七〇〇円）

工藤重矩他校注

新日本古典文学大系9

『金葉和歌集 詞花和歌集』

研究者を除けば目にふれる機会の少なかった『金葉和歌集 詞花和歌集』の注釈書が、手軽なかたちで一般の読者にも提供されるようになったのは、なによりも喜ばしいことである。ここではそのうち会員の工藤重矩氏校注の『詞花和歌集』を紹介する。

本書は国立歴史民族博物館蔵伝忠筆本（高松宮家旧蔵）を底本とし、語注と和歌の現代語訳を付す。著者自身「ひたすら歌意をのみ求めるのではなく、言葉に遊ぶことが平安和歌を読む大きな楽しみ」と述べているごとく、縁語や掛詞などの和歌の修辭法、類歌や同想といった和歌の発想法の解説が充実している。これは藤原俊成が『古来風体抄』のなかで、「誹諧の体になざれをかし」とのべて以来批判され続けてきた『詞花和歌集』のもつ言語遊戯的性格を、もう一度原点に立ち戻って検討を加え、積極的に評価していこうとする新しい試みである。このことによって、これまで古今風から新古今風へ過渡期のものとして軽視されがちであった『詞花和歌集』の評価もおのずから変わってくるのではなからうか。脚注では先行歌や典拠ばかりでなく、本集入集歌を本歌取りした後代の和歌にもふれてあり、和歌史における本集の位置を俯瞰できる。また漢語についての解説も詳しい。四季の部で「若菜一首」「菊四首」などと詠まれた素材ごとに表示があるのは、部立内部の構造や各首ごとの連関を配慮したものであろうか。

本文の後には、時代背景・成立・入集歌人などについての解説が付されている。これには直接あたってもうろほかないが、あえて要約するならば、保元の乱を直後にひかえて緊迫してゆく状況・人間関係がもたらした撰集への種々の影響ということにならう。しかし解説のなかでもっとも注目されるのは、『金葉和歌集』三奏本を『詞

『花和歌集』撰者藤原顕輔は見えていなかったと結論づけていることである。これまで三奏本は撰歌の資料となったと見られていたが、著者によれば、三奏本と『詞花和歌集』の重出歌はそのほとんどが『金葉和歌集』初度本と能因の『玄々集』とに見える歌であり、この二つの歌集を資料とすれば、かならずしも三奏本を見ていなくとも『詞花和歌集』は成立しえたのではないかという。

そのほか、『詞花和歌集』所収歌の他の文献における所在を示す「他出一覧」をはじめ、「出典歌台・百首歌解説」、および「初句索引」「人名索引」「地名索引」を付載し、利用者の便を図っている。

(平成元年九月 岩波書店 A5判 本文四五九頁 三五〇〇円)

中村幸彦著 『宗因 俳諧百韻評釈』

本書は、「宗因 独吟口まねやの巻百韻評釈」と題して、『俳句研究』の昭和六十三年一月号から、平成元年三月号まで、十五回にわたった連載に、若干の付記・補説を加えて単行本化したものである。

内容は、『宗因七百韻』に収められた、宗因独吟による「口まねや」の巻の百韻に対しての極めて詳細な評釈である。

「はじめに」の部分で、この注釈の成立した事情を述べ、その中で「そうした経験から私はすっかり宗因が好きになった。その原因は豊かな詩性である。」と記されるが、この評釈を読めば、著者のいわれる宗因の「詩性」とはどのようなものであるかがよくわかるであろう。

また、談林の連句に対して、これだけ詳細な評釈を付したことは、初めての試みであろう。俳諧史のなかで重要な位置を占め、論じら

れることの多い宗因ではあるが、今までにその具体的な読み方を示したものはなかった。この評釈を期に、詳細な読みを支えられた宗因論、談林論が展開されることが期待されよう。

(平成元年九月 富士見書房 B6判 一八五頁 二〇〇〇円)

井上敏幸他校注

新日本古典文学大系77

『武道伝来記 西鶴置土産』

万の文友古 西鶴名残の友』

岩波書店の新日本古典文学大系のうち、近世のものとして最初に刊行されたのが本書である。そのことは同時に、本書に求められるところの大きさを物語っている。ここではそのうち、井上敏幸氏校注の『西鶴名残の友』について紹介したい。

まず、注釈ということでは、『名残の友』は、西鶴の浮世草子全てを収める『定本西鶴全集』・『対訳西鶴全集』の他にこれまで注釈がなく、従って、本格的な注釈書は本書がはじめてと言ってもよい。こうした点は、本書に同じく収められた『武道伝来記』その他とも異なる、大きな意義であろう。

また、『名残の友』については、従来、俳諧の逸話集であるということ、笑話集であるということが言われてきた。この点について井上氏は、「解説」において、新たな読みを示されている。それは、西鶴の創作意識を考えると、『名残の友』に窺われる俳諧師の逸話集的要素と、笑話集的要素は分裂するものでなく、不可分のものとい

うことである。つまり、「元禄期における談林俳諧師西鶴」の、「當代俳諧との決定的な断絶感」、「やや淋しげな心境」、それが『名残の友』を吐、笑話へと傾斜させた要因であると述べられている。

『名残の友』は、西鶴の他作品に比して、研究は多くない。しかし、本書によって、それが更に進展することを信ずるものである。

(平成元年四月 岩波書店 A5判 六四〇頁 三九〇〇円)

白石悌三著 『芭蕉』

本書は、芭蕉研究において評価の高い著者の初めての論文集である。

所収の一三編の論考は、一九七五年から一九八六年にかけて各種の雑誌などに掲載されたもので、収録にあたって補訂を加えている。前半は芭蕉、後半は蕉門関係の二部構成をとっており、その細目は以下の通りである。

四季の構図

蛙——滑稽と新しみ——

挨拶ということ——奥羽路の唱和——

もう一つの「細道」

同行二人——『おくのほそ道』における曾良の役割——

俳文の論

風雅のまこと

芭蕉翁墨跡写

蕉門の形成と展開——芭蕉没年まで——

路通と曾良

去来——公開講座「芭蕉とその弟子たち」から——珍碩と許

六——『芭蕉物語』の断章——

旅人と我が名よばれん

「あとがき」において、「専門家の批判にも耐え、かつ一般の読者にもよんでもらえそうなものを選んで、一集を編んだ。」と著者自身の言われるとおり、本書は一般向けの瀟洒な体裁をとりながらも、研究書として逸することのできないものである。

それぞれの論考は既出のものばかりであるが、現時点でも尚、色あせることのない示唆や卓見を数多く含んでおり、一冊にまとめられたことによって、今後の芭蕉研究にますます大きな影響を与えていくものと思われる。

(昭和六十三年六月 B6判 二八二頁 二八〇〇円 花神社)

白石悌三他校注

新日本古典文学大系70

『芭蕉七部集』

本書は、岩波書店の新日本古典文学大系の一冊として出されたものである。

白石悌三氏の担当部分は、『ひさご』『猿蓑』『炭俵』の三編の校注と、付録の「歌仙概説」「幻住庵記の諸本」、それに解説として「七部集の成立と評価」である。

校注は、脚注で、語注・句意・俳言と季語の指摘をし、各作品の

最初の部分には、「編者」「書名」「成立」「意義」を簡潔にまとめる。「歌仙概説」は歌仙形式の概説で、簡潔にして要を得たもの。「幻住庵記の諸本」は、草案・再稿・定稿のそれぞれを掲出し、比較に便利である。

解説の「七部集の成立と評価」は、題名のとおり七部集の成立事情についての考察であり、また、本書での校注に対する基本的態度について記す。更に、最後に、参考文献の一覧が付されている。

また本書の巻末には「発句・連句索引」と「人名索引」が付されており、人名には簡単な人物解説が付いている。

校注は、従来の注釈で寸評程度に留まっていたもの、難解なもの、言いかえようのないもの、ともかく一句一句に律義に「句意」を示そうというように、今までの注釈にない試みを行っている。このように、『七部集』全体にわたって詳細な注が付されたのはまさに初めての試みと見られ、それが現代の芭蕉学者を代表する二人の眼で、通して行われたことの意義は極めて大きい。その意味で本書は『七部集』研究におけるひとつの画期をなすものである事は疑いようのない事である。

(平成二年三月 岩波書店 A5判 六五〇頁(索引四九頁)
三九〇〇円)

白石良夫校訂『広益俗説弁』

本書は、井沢蟠竜著『広益俗説弁』(正編二十卷)の翻刻である。蟠竜の『俗説弁』シリーズ、及びその他の著述については、本書の校訂者である白石良夫氏の「井沢蟠竜の著述とその周辺」(『近世文

芸』45、昭61)、「読本前史管見」(『読本研究』1、昭62)において、その文学史的位置づけ、再評価が行なわれた。その白石氏の翻刻・校訂という本書の刊行で、これまで翻刻は『読国民文庫』(大元)のみであった『広益俗説弁』が、信頼できる本文で、手軽に見られるようになったことは、本当に喜ばしいことである。

『俗説弁』シリーズの板元である柳枝軒は、当時、教訓本の類をほぼ一手に出版している。この『広益俗説弁』も、宝永・正徳から享保にかけて、知識の面での教育を志した、教訓本の一と考えることもできよう。そうした意味では、やはり柳枝軒から出された貝原益軒・西川如見などの著述と等しく位置づけられようし、いづれもよく読まれた。この時期における文芸界の知識愛好の風潮も、既に言われるとおりである。

また、その柳枝軒と蟠竜、椋梨一雪、谷秦山などの説話愛好グループの存在が指摘される。説話集に終始し、仏教説話的傾向も見える一雪の説話と、この時期の合理主義的、実証主義的風潮を反映し、それに考証を加えた蟠竜と秦山とは、明らかに相違するものではあるが、逆にそうでありながらも、共通の説話基盤の存在を指摘できることは、近世において説話ということを考えるうえで、甚だ興味深い。

ただ、残念なことに、本書は『広益俗説弁』のうち、正編二十巻のみの翻刻であり、後に出された後編五巻・遺編五巻・附編七巻・残編八巻は未収録である。それらを含めた「続編」の刊行を、切に願うものである。

(平成元年六月 平凡社東洋文庫 B6判 三七八頁 三〇九〇円)

中野三敏他三名編『大田南畝全集』

昭和六十年十二月から四年余を経て、『大田南畝全集』全二十巻がこのたび完結した。本全集については、二巻分刊行の際、本誌第六十一号(昭61・6)において、既に久保田啓一氏の《紹介》がある。本全集の意義については、そこに尽くされているため贅言を要しないが、全巻の構成については、当初の予定より変更があり、改めて以下に記すことにする。

- 第一巻 狂歌・狂文・狂詩 I
- 第二巻 狂歌・狂文・狂詩 II
- 第三巻 漢詩文 I
- 第四巻 漢詩文 II
- 第五巻 漢詩文 III
- 第六巻 漢詩文 IV
- 第七巻 戯作
- 第八巻 日記・紀行・書留 I
- 第九巻 日記・紀行・書留 II
- 第十巻 隨筆 I
- 第十一巻 隨筆 II
- 第十二巻 隨筆 III
- 第十三巻 隨筆 IV
- 第十四巻 隨筆 V
- 第十五巻 隨筆 VI
- 第十六巻 隨筆 VII

第十七巻 雜録 I

第十八巻 雜録 II

第十九巻 書簡・藏書目録・識語

第二十巻 補遺・年譜・参考編

なお、収録予定の「索引」については、後に単行本として刊行することのである。

さて、こうして全集の全体が明らかになると、例えば、第十九巻・第二十巻において、南畝藏書に付された識語までも網羅し、収録した点に、改めて本全集の特徴、大きな意義が感じられる。

また、最終巻となった第二十巻には、久保田啓一氏・宮崎修多氏作成、中野三敏氏校閲の「年譜」が収録される。本年譜は二段組で二百五十頁に及ぶ力作である。勿論、南畝にもこれまで年譜は存する。しかし、このように事項を漏らさず、例えば、何時、どのような本を南畝が借覧し、彼が何に関心をもっていたかというようなことまでも明らかにできるものは一人の年譜としても極めて稀であろう。それが、交友広く、博覧、筆まめな南畝という、年譜作成には最も難渋する人物であればなおのこと、その意義も大きいものがある。

以上のように、まさに南畝の全容を明らかにするが如き本全集の完結を、本当に心から喜びたいと思う。

(昭和六十年十二月〜平成二年三月 岩波書店 四六判 五五〇〇〜八六〇〇円)